

【論文】

仙台藩儒・大槻磐溪によるペリー来航前後の情報収集活動とその活用

嶋村元宏

【論文】

仙台藩儒・大槻磐溪によるペリー来航前後の情報収集活動とその活用

嶋村 元宏

【キーワード】

儒学者 昌平坂学問所（昌平黌） ネットワーク
『金海奇観』 「鎖国」と開国 別段風説書 受取始末

【要旨】

仙台藩儒者・大槻磐溪を対象とし、ペリー来航前後の情報収集活動の実態がいかなるものであったのか、さらにその収集した情報がいかに活用されたのかを明らかにすることが、本稿の目的である。

まず第一章では、磐溪が執筆した対外意見書から、磐溪がいかなる著作物を利用したのかを確認し、磐溪のもつ海外知識が、対外意見書を執筆するにあたりいかに活用されたのかを確認した。また、同じく対外意見書を執筆するにあたり根拠とした、本来幕府によつて厳重に管理されてしるべき対外関係文書を入手している実状を確認し、磐溪の情報収集能力について明らかにした。

次に第二章では、これまで活用がみられてこなかった『米夷紀事』を根本史料として利用し、そこに記述された内容から、浦賀奉行所与力中島三郎助、香山英左衛門、応接掛・林大学頭復齊、松崎満太郎、上田藩士・恒川才八、中津藩士、長州藩士等から情報を得ており、また儒学者・宮内彦太郎と共同調査をしていることが判明した。また、磐溪に同行した塾生が横手信太郎であったこと、ならびに絵師が辻探昌であったこと等、人的情報源について明らかとなった。さらに入手した情報を他の情報と照合するなどの活用がおこなわれていたことも判明した。

はじめに

アメリカ東インド艦隊司令長官マシュー・カルブレイス・ペリーを全権とするアメリカ使節団が、日本との通商を求め浦賀、横浜周辺へ来航したさいの状況について、各藩がそれぞれ探索方を派遣し、情報収集活動を展開していた^①。たとえば、津山藩は、藩医・箕作阮甫の養子である秋坪とお抱絵師・鍛形赤子を、福山藩は、家老・江木鰐水と阿部正弘の君側御用掛・石川和助（関藤藤陰）^②を、派遣していたことはよく知られていることである。本稿で対象とする仙台藩儒者・大槻磐溪についても、嘉永六年と七年のいずれの年も、仙台藩主・伊達慶邦より探索を命じられ、現地へ赴き情報収集活動をおこなっており、特に嘉永七年のペリー第二回来航時には、ペリーをはじめとするアメリカ使節団員の肖像画や、艦隊の動向、献上品類等の画像を『金海奇観』^③（早稲田大学図書館所蔵）としてまとめたことで知られている。

かつて筆者は、その『金海奇観』に含まれる画像の原本を磐溪はいかに入手したのか、またそれらがどのように伝播していったのかについて考察し、磐溪も学んだ昌平坂学問所関係者による、情報ネットワークの存在を明らかにすることで、従来封建的・非開明的とされた儒学者について新たな光をあてた^④。本稿は、引き続き大槻磐溪を対象とし、前稿では追究しきれなかったペリー来航前後の情報収集活動の実態がいかなるものであったのか、特に、その情報源となった人々はどうのようなものたちであったのか、さらにその収集した情報がいかに活用されたのかを明らかにすることを目的とするものである。

仙台藩医にして蘭学者の大槻玄沢の次男として江戸木挽町に享和元年に生まれた大槻磐溪に関する従来の研究の多くは、磐溪が儒学者、漢学

者であったことから、日本近世思想史^⑦あるいは文人としての作品や業績にかかわるもの^⑧、ならびに文人ネットワーク^⑨について焦点をあてたものであった。その文人ネットワーク研究の一つとして、工藤宜氏は、磐溪が遺した『塵積成山(積塵成山)』と題する貼り交ぜ帳一冊を紹介している^⑩。そこに含まれるペリー来航時に自らが描いた絵図面等についてふれているが、本稿が明らかにしようとする情報収集活動全般について考察したものではない。

そこで本稿では、まず、磐溪が著した対外問題に関する意見書・上申書類を分析し、いかなる著作物から海外知識を得ていたのかを確認するとともに、ペリー来航前後に磐溪が入手した対外関係文書について、その入手時期を中心に検討する。つぎに、嘉永七年の第二回ペリー来航時における情報収集活動について、その情報源、特に人的情報源も含めより具体的に明らかにする。また、あわせて、収集された情報がどのように活用されていたのかを、史料にもとづき実証していくことにしたい。

一 海外知識と対外関係文書の入手

(1) 海外知識

大槻磐溪が対外関係意見書を執筆するさいに参考とした著作物を確認することで、封建的・非開明的とされる儒学者のひとりであった大槻磐溪がいかなる海外知識を有していたかについてまず明らかにしていきたい。

磐溪が著した対外意見書として著名なものは、以下の五点が挙げられる。すなわち、イギリス軍艦マリナー号来航を契機に嘉永二年に著された、

① 『献芹微衷』^⑪

ならびに、嘉永六年にペリー・アメリカ使節ならびにプチャーチン・ロシア使節の来航にさいして相次いで上申された、

② 「六月八日仙台藩士大槻平次^{崇清}上書 儒役林大学頭^健へ 米国使節の渡来に就て」^⑫

③ 「八月十一日仙台藩士大槻平次^{崇清}上書 若年寄遠藤但馬守^{胤統}へ 米国国書に就て」^⑬

④ 「九月二十日仙台藩士大槻平次^{崇清}上書 勘定奉行川路左衛門尉^{護聖}へ 露船の処置に就て」^⑭

⑤ 「十月二十日仙台藩士大槻平次^{崇清}上書 老中阿部伊勢守正弘へ 露船の処置に就て」^⑮

この五種類の対外関係意見書のうち、はじめての対外関係意見書で、老中・阿部正弘から海防についての上申を求められ、嘉永二年十月三日に提出されたとされる①『献芹微衷』^⑪からみておきたい。

『献芹微衷』については、磐溪の子・大槻如電等は、磐溪が「国事に公然と嘴を容れられ、即ち開国論を唱へられた皮きりである。海堡篇・陸戦篇・水戦篇・隣好編上・下の都合五篇であつて、漢文でかゝれた。その中で隣好篇の上が開国論の主眼である」^⑯と、五編からなり、ロシアとの通交を提案していることから、ペリー来航以前の早い時期に書かれた開国論として評価している^⑰。磐溪がこれを執筆するにあたり、具体的に何を参照したかについての記述はなく、ロシアとの通信・通商について提言がみられる「隣好篇 上・下」においても、ラクスマンおよびレザーノフ両使節の来航にかかわる一般的な記述がなされているだけであり、参照した文献については触れてはいない。

しかし、これら両ロシア使節については、父である大槻玄沢をはじめ

とした蘭学者による海外事情書から得た情報にもとづいているものと思われる。嘉永六年一〇月にプチャーチン・ロシア使節の対応について老中・阿部正弘へ提出した、次のような書き出しから始まる上申書(⑤)により判明する。

私儀昔年環海異聞を編著仕候大槻玄沢と申者次男ニ御座候、魯西亜国之義ハ、弱年之頃今、膝下之談に時々承及、其内ニモ、文化年中、使節レサノツト^江論文御渡シノ当日、大通詞何某其段を内々使節^江申通し候節、レサノツトは常ニ変らず、神色自若として申候は、雨降て地固まるとやら、御断になるも、又一ツ之幸なり、此事の成就するハ、我等かくなりたる末之事に逆、両足ニ而地下を踏鳴らし為見候由など、今以耳に留り居り候²⁰、

すなわち、幼いころより、ロシアについては、父・大槻玄沢から聞かされており、特にオランダ大通詞「何某」、すなわち石橋助左衛門²¹がレザーノフに対して内々に通商拒否の旨を伝えたさいには、今回ロシアにとつて残念な結果ではあったが、これが将来の礎になるとして潔く受け入れたという話を鮮明に記憶しているというのである。このようなロシアの寛容さについては、イギリスとの比較のなかで、③でも明確に述べられている²²。この時の話が磐溪に与えた影響がいかに強かったかを知ることが出来る。

さらに、その一文に続けて、「其後此国ニ関係仕候西史ハ、追々涉獵仕殊更奉使日本紀行遭厄日本紀事等ハ、熟覧も仕、彼是考合候²³」とあり、ロシアに関する著作について探し求めるとともに、特に『奉使日本紀行』と『遭厄日本紀事』等は、熟覧したと自ら記述している。

これらの著作が大槻家に遺されていたことは息子の太概如電がまとめた『磐溪追遠展覧会 大槻文庫書目』(私家版、明治四一年)から判明

する。これは、当時東京の大槻家が所蔵していた²⁴著訳書類を「大槻磐溪三十年追遠展覧会」に出品したさいの目録である。前書きによれば、「大槻文庫所蔵明治以前西洋學術に関する著訳書類」を、「文学 六十一種」、「史学 七十九種」、「医学 百九種」、「理学 七十二種」、「兵学 百九種」、「法学 八種」、「工学 九種」、「欧書 十種」、「書画 二十四種」、「刻板 三種」に分類し、展示したようである。このうち、外国史および地誌に関する著作は「史学」に分類されており、「表」大槻文庫「史学」関連文献」に示したとおり七十九点確認できる。そのうちロシアに関する著作は、前野良沢『魯西亜本紀大統略記』(寛政五年)、志筑忠次郎『同附録』(寛政七年)、桂川甫周『魯西亜志』(寛政五年)、山村才助『魯西亜誌』(文化三年)といった、ラクスマン来航直後に輸入書籍をもとに著された著作である。それに加え、幕府の通商拒否に対する報復として始まった、いわゆる「文化露寇」に関する大槻玄沢『北辺探事』(文化三年)や、ロシアから帰国した漂流民による聞き書きをまとめた桂川甫周『北槎聞略』(寛政五年)、大槻玄沢『環海異聞』(文化四年)等を所持していたことがうかがわれる。

具体的な書名が挙げられ、磐溪が熟覧したとする『奉使日本紀行』と『遭厄日本紀事』については、文化元年のレザーノフ・ロシア使節に関連する翻訳書である。いずれもよく知られた著作であるので、詳しい解説は省くが、前者は文化元年に長崎へ来航したレザーノフ・ロシア使節も参加した、ロシア海軍大尉クルーゼンシュテルンの世界周航団の公式記録を、幕府天文方・青地盈(林宗)が翻訳し、同・高橋景保が校訂したもので、後者は、「文化露寇」に関連して、松前藩に拿捕され、一八一〇一三年にかけて幽閉されたゴロヴニンによる日本幽囚日記を、文化八年にオランダ通詞・馬場佐十郎が翻訳し、高橋景保が校訂したもの

【表】大槻文庫「史学」関連文献

No.	目録 番号	書名	員数	成立年	著者	摘要
1	62	魯西亜本紀大統略記	写 1	寛政5年	前野良沢	家蔵二本小者係山村才助自筆
2	63	同附録	写 1	寛政7年	志筑忠次郎	
3	64	魯西亜志	写 1	寛政5年	桂川甫周	
4	65	魯西亜誌	写 7	文化3年	山村才助	
5	66	印度誌	写 1	文化4年	山村才助	原書二冊家蔵欠其首巻
6	67	英吉利国紀略	1			年号姓名不詳 例言に雫の一字あり足立長集か
7	68	合衆国小誌	2	安政元年	小関高彦	
8	69	西洋列国史略	写 1	文化5年	佐藤百祐	
9	70	西洋小史	写 1	嘉永元年	長山樗園	
10	71	蕃史	2	嘉永4年	斎藤竹堂	
11	72	外蕃通表	写 1	嘉永6年	大槻恒輔	
12	73	遠西紀略	2	安政2年	大槻恒輔	
13	74	那波列翁略伝			小関三栄	
14	75	卜那把廬的紀略	1		大槻恒輔	
15	76	異国往来記	2	貞享3年	遠山信武	
16	77	華夷通商考	2	元禄8年	西川如見	
17	78	増補華夷通商考	5	寛永5年	西川如見	前書は未定稿を濫に上木されしとて更に増訂して出板す
18	79	西洋紀聞	2	宝永7年	新井勘解由	
19	80	紅毛談	1	明和2年	後藤梨春	
20	81	万国山海経	5	天明3年	大江文坡	京都人号菊丘臥山人
21	82	紅毛雑話		天明7年	森島中良	
22	83	蘭説辨惑	2	天明8年	大槻玄沢	
23	84	西域物語	写 3	寛政10	本田魯鈍斎	越後人名利明称三郎右衛門江戸に住し算術を以て名あり
24	85	万国新話	5	寛政元年	森島中良	
25	86	西洋雑話	4	享和元年	山村才助	
26	87	大西要録	写 1	享和3年	山村才助	
27	88	新訳東西遊記	写 2		山村才助	
28	89	西洋商舶原始	写 1		山村才助	
29	90	和蘭通舶	2	文化2年	司馬江漢	
30	91	采覧異言	2	正徳3年	新井白石	
31	92	増訂采覧異言	13	享和2年	山村才助	
32	93	和蘭地図略説	写 1	明和8年	本木仁大夫	
33	94	輿地図名訳	1	安永6年	本木仁大夫	奥書に崎陽得之書写林子平とあり 安永は其書写せし時の年号なり
34	95	万国図説	写 2	天明6年	桂川甫周	
35	96	泰西輿地図説	17	寛政元年	朽木昌綱	
36	97	地球全図略説	1	寛政9年	司馬江漢	
37	98	輿地全図説	1	享和2年	稲垣子戡	明人原著其漢文を和訳せしもの
38	99	新字小識	2	文化13	猪俣昌永	亜墨利加地誌なり筑前安倍龍の著を読みし者訂正五冊嘉永中出版
39	100	輿地誌略	写 5	天保中	青地林宗	総説及魯意仏英四国亜細亜諸島印度都児格の地誌なり
40	101	坤輿図識	6	弘化3年	箕作省吾	正三冊補三冊
41	102	三才正蒙	3	嘉永3年	永井青厓	筑前人名則
42	103	八紘通誌	6	嘉永3年	箕作阮甫	
43	104	地学正宗	8	嘉永3年	杉田玄瑞	
44	105	万国図誌	写 1	文久2年	手塚律蔵 佐波銀次郎	万国とあれど首巻一冊のみ

No.	目録 番号	書名	員数	成立年	著者	摘要
45	106	地球万国全図	1	天明2年	長久保赤水	弘化元年再刻本あり
46	107	嶋蘭新訳地球全図	1	寛政8年	橋本宗吉	
47	108	地球一覽図	1	天明3年	三橋釣客	釣客は題言にして愚山の印あり松本愚山か
48	109	銅板万国略図	1	文化8年	高橋景保 下津子助図	亜欧堂水田善吉彫
49	110	万国地球全図	1	天保9年	阿部櫟斎	
50	111	新製輿地全図	1	弘化元年	箕作省吾	
51	112	地球万国方図	1	嘉永2年	翠堂彭	本姓名未詳上に湯陵とあれば湯島居住の人なるべし
52	113	亜西亜略図	1	慶応3年	陸軍所	西伯亜の地図なり書者は前田又次郎とあり
53	114	日本輿地路程全図	1	安永4年	長久保赤水	日本図に経緯度を施せしは此図を初とす刻成は七年なり栗山の題詞
54	115	実測日本全図	写 2	文化元年	伊能勘解由	大中小三図あり是其小図にて阿部勢州侯旧蔵明治初年文部にて出版
55	116	東海舟程全図	1	天保11	小野寺謙治	仙台領より江戸海に至る船路 小野寺風谷仙台儒員
56	117	三航蝦夷全図	写 14	年月不詳	松浦武四郎	
57	118	三国通覧	図 1 5	天明5年	林子平	
58	119	北地危言	1	寛政9年	大原小金吾	京都隠士曾松前侯の聘に応じ所懐を陳せしとぞ明治廿年活字出版
59	120	北辺探事	写 5	文化3年	大槻玄沢	文化二年北地に魯寇ありし時其国の事情を探りしもの
60	121	婆心秘稿	写 3	文化5年	大槻玄沢	是年長崎に英虜の変あり仍て其国の形勢を論したるもの
61	122	野作雑記訳説	写 6	文化6年	馬場佐十郎	野作は蝦夷の漢訳字
62	123	漂民問答	写 1	寛政5年	中川勘三郎 問 船頭光太夫答	
63	124	北槎聞略	写 13	寛政6年	桂川甫周	光太夫魯国に在る十余年其物語を筆記したるもの
64	125	環海異聞	写 8	文化4年	大槻玄沢	仙台領の漂民記事
65	126	続海外異聞	写 12	文政11	大槻玄沢	正編は仙川甫周所輯不蔵
66	127	亜墨新話	写 5	弘化元年	前川文三	阿波藩士其国の漂民話説
67	128	遭厄日本紀事	写 16	文政8年	馬場佐十郎 杉田立卿 青地林宗	文化八年魯人兀老尹等漂着松前幽囚三年獲還其間日記也
68	129	彼理日本紀行	写 10	文久2年	手塚拙蔵 工藤岩次	嘉永六年安政元年米国使節彼理来日本結通信其記行也
69	130	鎖国論	写 1	享和元年	志筑忠雄	元禄中蘭人ケンブル日本記事抄訳
70	131	蕃賊排擯訳説	写 1	文化5年	高橋景保	同上
71	132	切支丹来朝実録	写 1	寛永10年		
72	133	南蛮寺興廃記	1			
73	134	金城秘輶	写 2	文化9年	大槻玄沢	寛永中仙台藩士支倉常長が羅馬より将来せし書器の考証
74	135	岡本三右衛門筆記事	写 1			寛永末羅馬人来唱耶蘇囚之江戸獄改名岡本三右衛門即其記事也
75	136	蘭学重寶記	写 1	嘉永6年	加壽麻呂	一名和蘭年歴 著者不詳其本姓郷貫
76	137	洋学燕石紀	1	文政3年	川島元成	丹波人日本漢土西洋対照年表燕石は玉に似たる石にて愚人所寶とぞ
77	138	蘭学事始	1	文化12	杉田玄白	蘭書訳述の苦学を記して大槻玄沢に与へしもの 明治二年上木
78	139	西賓対晤	写 1	文化11	大槻玄沢	寛政六十享和二文化三十七一の六回蘭人来貢の時に学術質問筆記
79	140	府下蘭学者姓名		安政2年	勝麟太郎	蛮書調所翻訳用にと取調たるもの 杉田箕作等総て五十八名

※『磐溪追遠展覧会 大槻文庫書目』（私家版、明治41年）をもとに作成

である。

幕府へのレザノフ・ロシア使節への対応、およびそれを契機として発生した「文化露寇」といった、一八世紀末から一九世紀初頭における国際的緊張関係を生み出したこれら二つの事件が、磐溪をしてロシアへの関心を高めたものといえよう。なお、②と④については、それぞれ実際に来航したアメリカとロシア使節への対応策であり、磐溪が強調していることは、他の磐溪が著した対外関係意見書との違いはみられない。

しかし、それらの対外関係意見書も含め、ペリー来航以前において磐溪は、蘭学者ならびに海外事情書から得た、ロシアを中心とする各国にかかわる海外知識をもとに執筆していたのである。

(2) 対外関係文書

磐溪は、蘭学者が翻訳・執筆した海外事情書に加え、本来幕府により厳密に管理されていたべき重要機密情報である、複数の対外関係文書を手に入っていた。これは嘉永六年六月三日、ペリー・アメリカ使節がはじめて浦賀へ来航したさい、藩命による異国船の動向についての探索を終え帰府した直後の六月八日に、林大学頭復齋へ提出した対外関係意見書⁽²⁾の記述から、具体的に知ることができる。

一、昨日帰宅仕候後、尚又浦賀表^江罷越委細見分仕候者直話二承り候処、此度之異国船愈北亜墨利加二相違無御座候、……、使節之者持参之国書御受取二相成候上ならてハ、睨と相分り兼候得共、去ル子年和蘭人風説書を以申上候通、近海之内二一嶋を拝借仕、石炭等差置度と申事二も可有之、尤一昨年帰朝之土州漂流人万次郎咄し二も、日本近海捕鯨等之節、薪水等無差支様、東海之内一ヶ所費請度由、米利幹人申聞候儀も有之由承り候得は、旁以右一條二相違も有之間敷哉と奉存候⁽²⁶⁾、

ここにあるように、来航直後の探索では、来航した異国船の船籍について把握できないまま帰府していたが、その後浦賀からの新たな情報によりほぼアメリカ船であることを確信したのである。それをふまえ、アメリカ大統領国書の内容を確認するまでは、アメリカ側の要求がいかなるものであるかは確証がないとしながらも、一つには、日本における石炭貯蔵場所の確保であろうことを「去ル子年和蘭人風説書」の記載から推測している。

「和蘭人風説書」とは、一般的には、寛永一八年以降オランダから提出されるようになった通例の「風説書」を指すが、「子年」、すなわち嘉永五年にもたらされた通例の「風説書」には、アメリカの使節派遣ならびに石炭貯蔵所の確保をはじめとするアメリカ側の要求に関する記載はない⁽²⁶⁾。また、嘉永五年の「別段風説書」には、「日本湊の内都合宜所」(長崎訳)、あるいは「相応なる港」(江戸訳)に石炭貯蔵場所を求めているが、「近海之内二一嶋を拝借仕」とあるような、島嶼部を指定した記述はみられない⁽²⁷⁾。島嶼部に石炭貯蔵場所を要求する旨記述されているのは、嘉永四年までオランダ商館長であったレフィスゾーンが、知人のアメリカ人パーマーから送られた対日方針に関する複数の書類をまとめ、帰国後の一八五二年(嘉永五年)に公刊した *Bladen over Japan* (『日本雜纂』) にみられる。その訳文には、

一、日本・亜墨利加両国ノ交接意ノ如ク整ヒ、唐国ニ亜墨利加蒸氣船通路ノ企、蝦夷ノ都府サンガル^{名 地}ノ海門ニ接ル松前及ビ対馬ノ属嶋フコンフコンク^{名 島}ノ港ニ石炭場ヲ設ケ(後略)と記載されている⁽²⁸⁾。

ペリー来航以前にあつて、アメリカが石炭貯蔵場所を日本の島嶼部に求めようという意図を持っていたことを示す記述は管見の限りこれだけ

であり、磐溪が参照した「去ル子年和蘭人風説書」とは、レフィスゾーンの『日本雑纂』であつたことになる。

さらに、「一昨年帰朝之土州漂流人万次郎咄し」を根拠に、アメリカ側の要求内容について言及している。「土州漂流人万次郎」とは、天保一二年に漂流し、嘉永四年アメリカから帰国した中浜万次郎のことである。万次郎によるアメリカに関する口述書は、

- A 「琉球使番取調記録」(嘉永四年正月)、
- B 「琉球在番奉行取調記録」(嘉永四年二月)、
- C 「長崎奉行牧志摩守取調記録」(嘉永四年十一月)、
- D 「土佐藩取調記録〔漂客談奇〕」(嘉永五年初冬)、
- E 「薩摩藩取調記録」(嘉永六年八月)、
- F 「江戸幕府取調記録」(嘉永六年一月)

の六種類が知られている。⁽²⁹⁾

このうち、EとFはこの対外意見書が上申された嘉永六年六月以降に成立したものである。したがって、磐溪が参照可能であつたのは、AからDまでの、薩摩藩により実質支配されていた琉球で、薩摩藩がおこなった訊問に対する口述書(A・B)と、その後長崎へ回送され、長崎奉行牧志摩守義制によっておこなわれた訊問の口述書(C)、および土佐藩の吉田東洋がおこなった尋問書(D)ということになる。具体的に何れの口述書を手し得たのかは不明である。しかし、嘉永六年一月、土佐藩の絵師・河田小龍が藩命によりあらためて聞き取りをおこない、それを『漂異紀略』全四冊としてまとめたものは広く一般へも流布したが、磐溪は本来一般には流布し得ないこのような機密情報にまでもアクセスできる立場にあつたということになる。

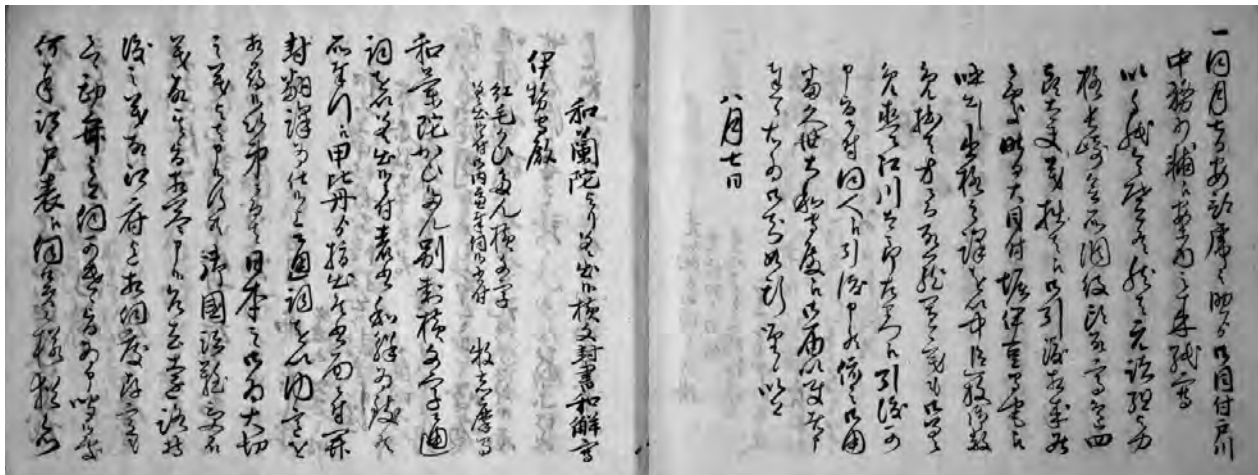
以上、対外意見書中に具体的に記載された対外関係書をみてきたが、

次に、大槻家に遺された、磐溪が収集したと思われる対外関係書をみておきたい。一般に『和蘭告密書御受取始末』(以下、『受取始末』)と称される史料である。

『受取始末』は、複数の公文書を一括した編纂文書の総称である。これは、嘉永五年六月五日に新任オランダ商館長・ドンケル・クルティウスが、通例の風説書ならびに別段風説書とともに持参した『バタヴィア(東インド)総督公文書』⁽³⁰⁾と『日蘭通商条約草案』⁽³¹⁾を提出する許可を求めたのに対し、これらの受取可否に関する長崎奉行から幕閣への問い合わせ、幕府内部での評議、方針決定、クルティウスへの通達ならびに、それらの補足説明等の付属文書といった、当時別個に成立した一連の関係文書よりなっている。

このような手続きが必要となつたのは、新たにもたらされた二つの公文書は、別段風説書に記載されたいわゆるペリー来航予告情報に関連した文書であり、幕府としては入手すべき重要情報であつたにもかかわらず、幕府自らそれらを手入することを禁じていたからである。つまり、弘化二年のいわゆるオランダ国王の開国勧告への返答にあたり、朝鮮と琉球のように国書の交換をおこなえる通信関係にはないオランダからの公文書の受け取りを以後拒否することを通告していたため、この時点において、それらの公文書を受け取ることができなくなっていたのである。そこで、それを受け取れるようにするための評議をおこない、その結果、別段風説書同様、返書を求めない一方的な文書であることを確認したうえで、提出を許可することに決したのである。⁽³²⁾この一連の経緯にかかわる文書を一括したのが『受取始末』である。

この『受取始末』が一括文書として流布していたことは、嘉永七年の日米条約交渉にあたり幕府側全権首席であつた昌平坂学問所総

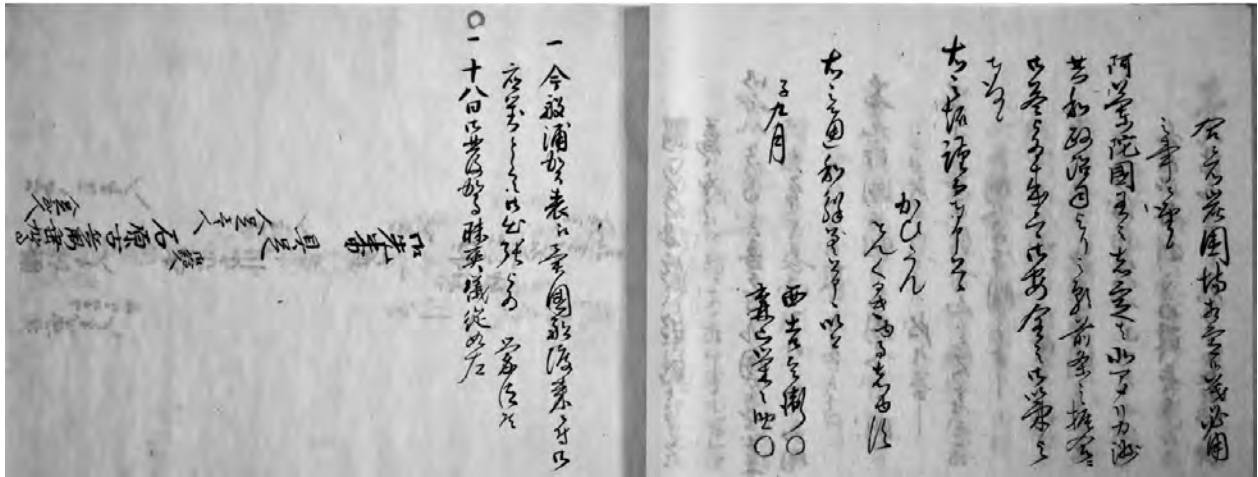


【写真 1-1】『竹田鼎の日記』（中嶋宏子氏所蔵）：『受取始末』冒頭

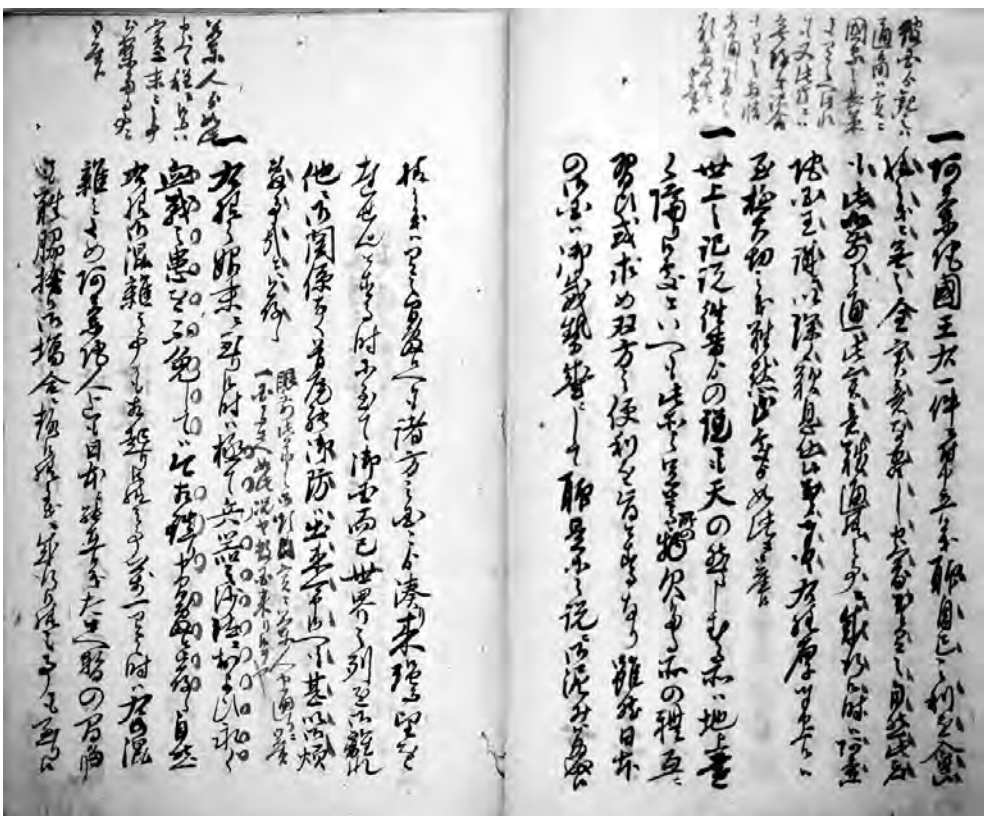
裁・林大学頭復斎の従者として、アメリカとの応接に参加した竹田鼎による日記⁽³⁵⁾（以下、『竹田鼎の日記』）から判明する。『竹田鼎の日記』は、ペリー第一回来航の嘉永六年六月から書き始められており、ペリー来航に関して幕府が林家へおこなった指令、現地からの注進状、上申書等が日付順で記載されている。『受取始末』は、「一、同月七日安部庸之助公御目付戸川中務少輔^江案内之来紙写」と題する八月七日付の書翰の写しに続けて改丁後書きはじめられている。この文書の後には嘉永七年正月に、応接掛として浦賀出張が林大学頭へ対して命じられたことに関連する記述である。

『受取始末』の前後において、紙質ならびに筆跡に変化はみられない（写真1-1・2）。したがって改丁されているとはいえず、『受取始末』の部分だけが後で差し込まれたとは考えづらく、竹田鼎は、第一回ペリー来航後の嘉永六年八月から嘉永七年正月までの間に『受取始末』を手したと考えられる。なお、「竹田鼎の日記」では、この一連の文書を総称する表題は付されていない。したがって、林家周辺にもたらされたさいは、とくに表題がない状態で流布していたと思われる⁽³⁶⁾。

一方、磐溪による『受取始末』⁽³⁵⁾は、「竹田鼎の日記」中の『受取始末』とは異なり、「和蘭告密書御請取始末^{嘉永五子年 壬子六月}」との内題が付されており、かつ朱による書き込みや本文中に傍点や圈点および傍線等がみられる（写真2）。さらに、嘉永二年から同五年までの「別段風説書」からアメリカに関する記事の書き抜きと、嘉永六年に実際に浦賀へ来航したアメリカ船情報をあわせた「防微録⁽³⁶⁾」とともに、「^{嘉永 壬子}和蘭告密書御受取始末^{附米利幹 渡来記}」と記載された題簽が貼られた表紙が付され一冊に綴じられている。なお、「防微録」は、朱書きも含め「和蘭告密書御請取始末^{嘉永五子年 壬子六月}」と同筆である。したがって、「竹田鼎の日記」に含まれる表題をもたな



【写真 1-2】『竹田鼎の日記』（中嶋宏子氏所蔵）：『受取始末』 末尾



【写真 2】『嘉永五年壬子六月和蘭告密書御請取始末 附防微録』（宮城県図書館所蔵）

い『受取始末』を磐溪は入手し、朱の書き込みを入れたり、注目すべき箇所には傍点や圈点および傍線等を付したりしたうえで、「和蘭告密書御請取始末」という一括文書としての名称を与えたと考えられる。ただし、入手経路については、林家あるいは昌平坂学問所周辺からの情報提供の可能性もないわけではないが、入手時期も含め不詳である。

なお、朱書きを加えた本史料の成立時期は、その書き込みから推測可能である。「此度渡来之節、ヘルレイハ、シユスイハンナニ罷在候由」と、実際の来航を受けた嘉永六年時点におけるコメントや、「一説ニ右舩之使節を江戸ニ差越候命を受候由ニ有之候」という本文に対し、「来春如此なるへし、可畏々々」と、翌年嘉永七年の再来航について注記で言及していることから、朱書き等は、ペリー艦隊が一時的に日本を離れた嘉永六年七月以降、実際に再来航した嘉永七年正月以前までの期間に書き込まれたものと考えられる。これは、先の竹田鼎が『受取始末』を書きとめた時期ともほぼ一致しており、『受取始末』はペリーが一度日本を離れた嘉永六年七月頃から流布し始めたと考えられよう。

また、このような『受取始末』に朱による書き込みがされているヴァージョンは、安中藩儒・添川廉齋が対外関係文書を収集・編纂した『有所不為齋雜録』⁽³⁷⁾や『外交雜纂』(作者不詳)⁽³⁸⁾等にも含まれており、書き込みや傍点、圈点、傍線に至るまでほぼ同一である。すなわち、一連の関係文書が一括されただけの『受取始末』が初め流布し、それを入手した磐溪が朱による書き込み等をおこない、その『受取始末』が別途流布したと考えられる。

最後に、日米条約締結前後の経過について、磐溪が入手した三種類の文書により明らかにした『和米始末』⁽³⁹⁾について検討しておきたい。

「目次」は以下のとおり各種文書の収録意図も含め記述されている。

目次

〈「レヒソン」^名人日本紀 嘉永四年辛亥 彼紀元一千八百五十年

此紀ヲ読テ米利幹人未タ日本ニ至ラザル前ノ胸中成算ヲ察ス

ベシ、

〈横浜下田二回条約 嘉永七年甲寅 彼千八百五十四年、

此条約ヲ読テ米利幹人日本ニ至リテ後一二其期望通りニ叶ヒタルヲ知ルヘシ、

〈「ポルトメン」^名人内密上書 同年八月、

此上書ヲ読テ米利幹人と親後ノ情況ヲ見ルヘシ、

右三種ノ書ヲ読テ米利幹人日本ト和親スル始末明白ニ領会ス

ベシ、因テ名ケテ和米始末ト云フ、

嘉永甲寅秋九月 太平逸民某識

ここにみられるように、本史料はペリー来航以前におけるアメリカの対日方針、日米条約締結によりアメリカの要求がかなったこと、条約締結後におけるアメリカの状況を伝える三種類の関連文書を、ペリーが日本を去ったあとの嘉永七年九月に「太平逸民某」、すなわち大槻磐溪がまとめたものである。

『和米始末』には三種類の文書が含まれているが、二つ目の「レヒソン」^名人日本紀」はすでに嘉永六年六月八日に林大学頭復齋への対外意見書にみられた「子年和蘭人風説書」⁽⁴⁰⁾で、ペリー来航以前に入手していたことはすでに指摘したとおりである。ここに収録された文書は、一八五〇年までにまとめられたパーマーからレフィスゾーンに送られたアメリカの対日政策についての情報のみならず、対日政策に関する記事が掲載された「告牒」、すなわち一八五二年にニューヨークで発行された新聞記事を含むものである。

二つ目の「横浜下田二回条約」は、嘉永七年三月三日に神奈川で締結された「約条」(神奈川条約)とその附録条約として、領事裁判権、通貨交換規定、遊歩区域等、開港場における細目について定め、嘉永七年五月二二日に下田で調印された「約条附録」(下田条約)の漢文和解である。神奈川条約は、本文上部に漢文版が和解の条文と対応するよう朱

で付記されている。

静嘉堂文庫所蔵『和米始末』の表紙に貼られた題簽（写真3）には、「磐溪 関研両先生筆記」とあるが、磐溪とともに先生として記載されている関研（藍梁）は、膳所藩に仕える儒者で、この当時主席応接・林大学頭復齊の補佐として、林家塾頭・河田興（迪齋）とともにアメリカとの交渉に臨み、条約漢文版の作成にかかわっていた。したがって、ここに収録された神奈川条約及び下田条約は、関から入手したものと考えられる。関と磐溪は同時期に昌平坂学問所で学んだ仲であり、『金海奇観』にも、関研から提供された画像が含まれていることはすでに指摘した通りである。⁽⁴⁾ここから昌平坂学問所関係者のネットワークの存在が確認できる。

三つ目の文書は、嘉永七年八月、アメリカ・蘭語通訳官ポートマンが下田奉行へ内密に提出した意見書である。⁽⁴⁾磐溪が記すように、下田条約



【写真3】『和米始末』（静嘉堂文庫所蔵）：表紙

締結後のアメリカの思惑が記されているが、「爰ニ一体之主意を記さん事を欲すれ共、其時機なれハ、巨細に書載する事甚難し」と、当時にあつてはまだ公表できない内容もあるとの断りを入れつつ、和親を取り結ぶことの重要性について述べている。

磐溪は、本来幕府によつて嚴重に管理されるべき情報を活用して、アメリカとの間に「和親」関係が成立した経過を明らかにしたのである。

以上、磐溪は、「子年和蘭人風説書」と称したレフィスゾーン著『日本雜纂』、中浜万次郎による口述書、ペリー来航予告に関する追加情報の受け取りの経過を綴った『受取始末』、神奈川条約漢文並びに漢文和解、下田条約漢文和解、下田奉行宛ポートマン内密意見書を入手していたことを明らかにした。また、磐溪がそれまで蓄積してきた海外知識をもとに、これら重要機密情報を活用し、的確な対外意見を述べてきたことも判明したのである。

二 ペリー第二回来航前後の実地見聞と情報の活用

大槻磐溪は、ペリー来航時に、藩命により現地へ実際に赴き情報収集活動をおこなったことについては、『磐翁年譜』ならびに『磐溪先生事略』によつていたことは指摘した通りである。⁽⁴⁾また、嘉永六年六月の第一回来航時については、『磐翁年譜』ならびに六月八日付林大学頭復齊宛上申書から、六月三日から七日まで浦賀へ探索に行っていたことは確定する。しかし、その時の情報収集活動の結果については、七日までの探索の結果、浦賀へ来航した異国船がどの国のものであるか判明しなかった⁽⁴⁾ということだけである。先行研究が参照している『磐翁年譜』および磐溪が子の如電等へ話し聞かせたことをまとめた『磐溪先生事略』にも、第一回ペリー来航時における具体的な情報収集活動については触

れられていない。

一方、嘉永七年の第二回ペリー来航時の情報収集活動については、『磐翁年譜』ならびに『磐溪先生事略』のいずれも、嘉永六年同様具体的に情報収集活動については記述されていない。仙台藩主・伊達慶邦へ上呈した『金海奇観』ならびに、自身が収集した画像を張り交ぜた『塵積成山』から、その活動が推測され、語られてきたにすぎない。

ここでは、これまで積極的に利用されてこなかった『米夷紀事』と題する自らの情報収集活動状況についてまとめた史料⁽⁴⁶⁾により、第二回ペリー来航時における磐溪の情報収集活動⁽⁴⁷⁾ならびにその活用実態についてみていきたい。

(1) 第一回浦賀調査…嘉永七年一月三日～七日頃

『磐翁年譜』には、「正月十五日米国船再ビ渡来ニツキ命を奉ジ数度浦賀神奈川ニ往復⁽⁴⁸⁾」と、嘉永七年一月一日に藩命により浦賀へ向かったとされている。しかし、磐溪はすでに藩命を待たずに、磐溪自身の判断により、ペリー再来航一〇日ほど前の一月三日、塾生一人をともなつて浦賀へ向かっている。今回の調査は、「辺備ヲ問ント欲シ」とあるように、ペリー再来航が予告された時期を見計らい、それ以前に浦賀の海岸防禦状況を確認することが目的であった。

四日浦賀奉行所がある西浦賀へ到着すると、前年ペリーとの応接にあたった浦賀奉行与力・中島三郎助を訪ね、その後東浦賀へ渡り、「船小屋ノ後ノ岸ヨリ港中ニ浮ヘタル船」を覗いている。「二十間ノ異国製ノ船」と記述されているこの船は、この年六月に日本初の西洋式帆船として竣工する鳳凰丸である。磐溪は鳳凰丸を実際に視察するとともに、「委クハ、図并仕法帳アリ」と、鳳凰丸に関する詳細については、別途図面と建造法についてまとめたことを示唆している。情報収集を目的として浦

賀を訪れたのであるから、詳細を記録することは当然であると考えられる。国防上の重要機密事項を、建造担当者である中島自身から直接入手していたのである。

そして翌五日は対岸の東浦賀に設置されている砲台を見学している。ペリー艦隊の再来航に備え築造されていた明神崎台場であると思われる。しかしここを見学した磐溪は、正月休みのため作業が中断していることを知り愕然としている。日本では正月期間であるが、西洋暦では一月末か二月にあたることから、ペリー艦隊がいつ再来航してもおかしくない状況であるにもかかわらず、臨戦態勢とは程遠い弛緩した雰囲気を嘆いたのである。

その後、中島の役宅において、アメリカ使節の応接場所の準備を進めていた「加山英左衛門」、すなわち中島の同役である香山英左衛門から、応接場を鎌倉の光明寺として準備していることを聞かされている。そして、七日には江戸へ戻る途中、本牧の先端に位置する本牧十二天社を参詣し、さらに本牧周辺の警衛にあたっていた熊本藩の陣屋跡と、当時警衛を命じられていた鳥取藩が建設していた陣屋を巡検しているが、その状況について、「到ル処辺備懈惰嘆息ニ堪ヘス」との感想をもつて帰府している。

(2) 江戸での情報収集…嘉永七年一月二日頃～二四日頃

江戸に戻った磐溪のもとへペリー艦隊再来航の報が達したのは、一月一〇日のことであった。このときの情報は、駿河沖に異国船が出現し、内三艘が港へ接近し、残り二〇艘が遠洋にとどまっているという事実とはほど遠いもので、その情報の出所も明らかにされていない。

しかし異国船の来航は事実であり、一月一二日に葦山代官・江川太郎左衛門から、一日に船籍不明の異国船六艘が伊豆・城ヶ島沖で確認さ

れたという報告が飛脚便によりもたらされた。そして、一二日には四艘の異国船が城ヶ島に接近し、すぐに退去したことが伝わってきていることや江戸ではイギリス船かフランス船であろうとの噂がながれていたことが記されている。

このような情報が流れるなか磐溪は、「亜墨ノ探船ニテ駿州豆州辺ヨリ相州海岸ノ辺備ヲ探索スル為ニ先ツ越シタルナルベシト思ヘリ」と、駿河・伊豆周辺の海防状況を確認することを目的に、ペリー艦隊の先遣隊が来航したと推測している。

次に一四日、一五日のペリー艦隊の動向について詳細が伝えられ、一九日の朝には、浦賀から江戸へ戻ってきた上田藩士・恒川才八から最新の報告を受けている。恒川は、西洋砲術家で信濃国松代藩士・佐久間象山の門人であったこと⁽⁴⁹⁾から、象山とも親交があった磐溪へ情報を提供したと思われる。

このように、磐溪は江戸にいながらにして、各種ルートから浦賀へ再来航したペリー艦隊の情報を逐一収集しつつ、その一方で、幕府および諸大名の動きについても見逃してはいなかった。

恒川から浦賀情報を入手した一九日に、すでに応接掛として浦賀へ向かった伊沢美作守政義に加え、前日一八日に幕府が林大学頭復齊、井戸対馬守覚弘、鶴殿民部少輔長鋭、松崎満太郎を応接掛として浦賀へ派遣することになったことを知った。これについて磐溪は、戦端が開かれたさい、江戸市中の混乱が予想されるにもかかわらず、江戸町奉行の職にあった井戸覚弘の後任人事を怠った幕府の危機感の欠如を痛烈に批判している。

また、応接場の警衛担当藩をめぐって、細川家と毛利家は勇ましく自ら担当することを幕府へ建白したが取り入れられず、一五日になって真

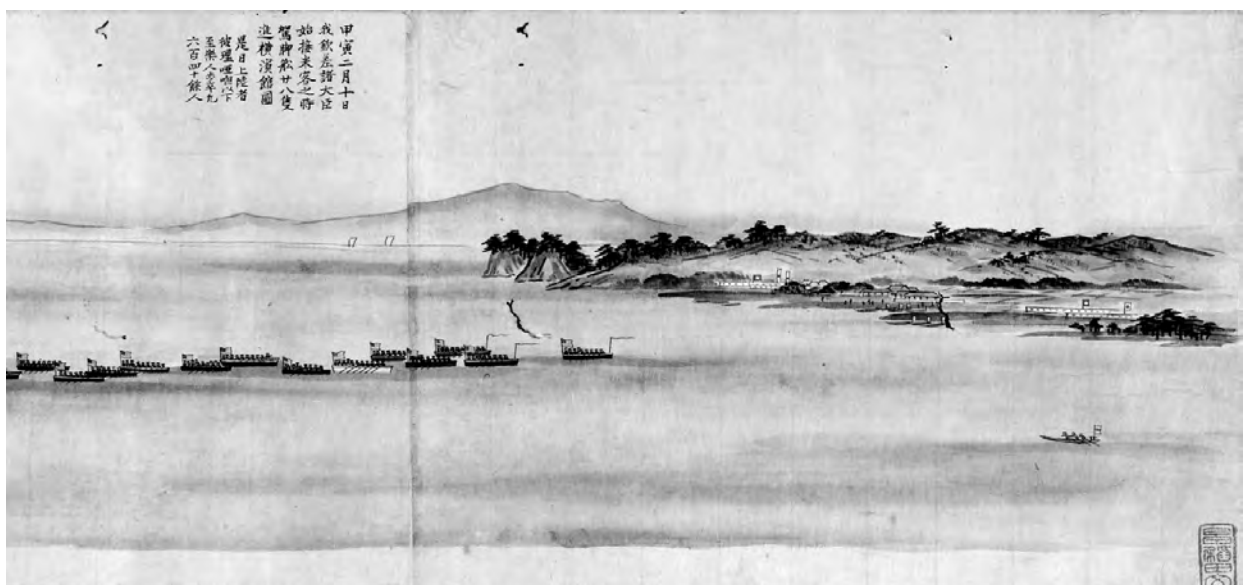
田家と小笠原家が任命されたとの情報を得ている。

なお、細川家に関連して、嘉永六年のペリー来航時、本牧の守衛を担当したさい、「貫目以上之筒百五十挺」を川口鋳物師増田宗次郎へ命じたこと、その総額が一五万両となることが欄外に付記されている。西洋砲術に高い関心を持っていた磐溪は、このような兵備状況にも強い興味を抱いていたことがうかがえる。また、応接場の警衛に関連して、費用負担が五〇万両の見通しであることが記述されている。

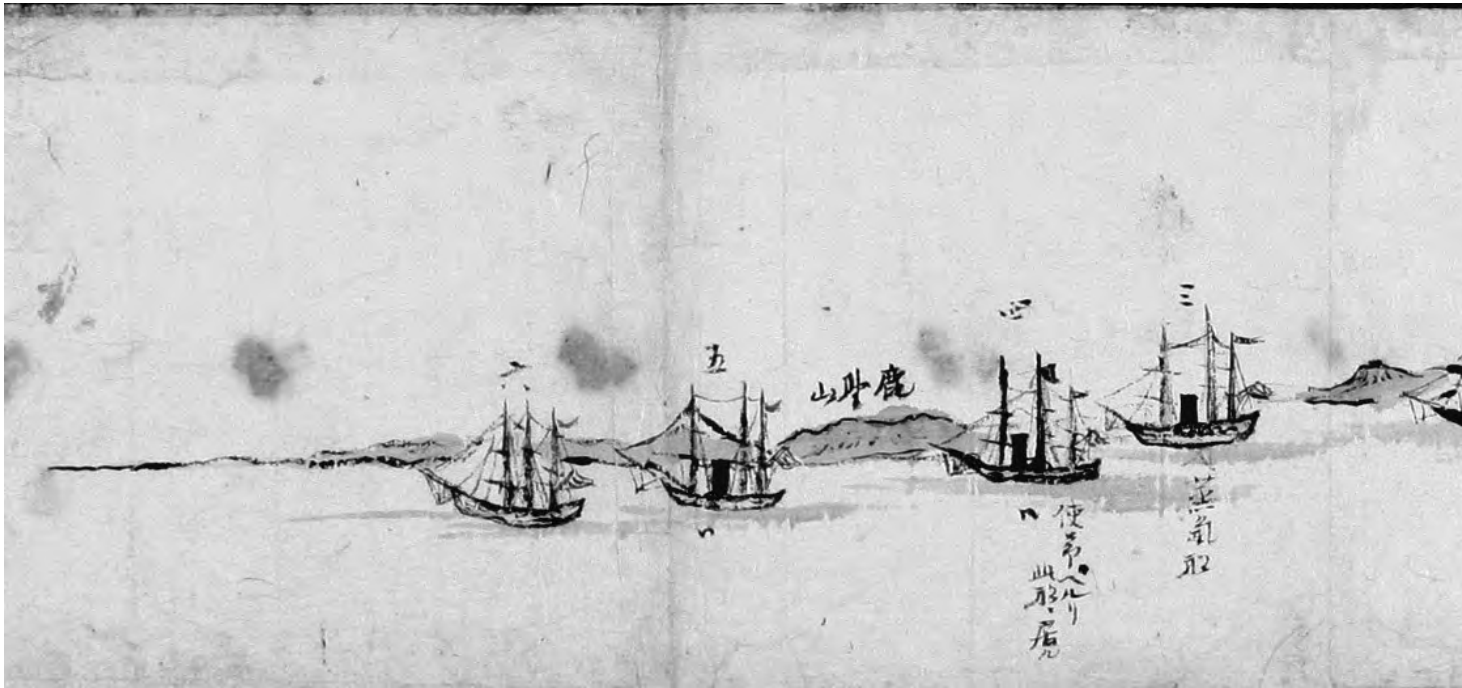
(3) 第二回浦賀調査…嘉永七年一月二五日

ペリー第二回来航にあたり磐溪へ藩命が下ったのは、来航から約一〇日後の一月二三日であった。仙台藩主・伊達慶邦より「浦賀二赴クベキ命」が正式に発出されたのを受け、二五日に磐溪は「画師辻探昌」をもなつて浦賀へ出発している。なお、ここに絵師として辻探昌の名がみられるが、この絵師についてはよく知られていない。『金海奇観』中の図像にもその名は見いだせず、そもそも絵師をともなっていたことはこれまで推測されてはいたが、具体的な絵師についての記述があったのはこれが初めてである。いずれにせよ、すでに再来航が予告されていたことから、再来航時に備え絵師を同行させることを想定していたと思われる。

江戸を発った磐溪は、浦賀へ向かう途中も情報収集に余念がなかった。磐溪が注目したのは、日本との通商を迫るペリー艦隊の再来航により、条約交渉の進捗状況によつては戦端が開かれかねない危機的状況のなか、江戸周辺の海防態勢はいかなる状況にあるのかということに関心を持っていたのである。土佐藩が担当する浜川砲台、松山藩の防備状況等についてその土囊の積み方に至るまで、微細に観察している。そして金沢では、本牧から浦賀まで一望している。すなわち、「扇屋トイヘル茶



【写真5】『金海奇観』（早稲田大学図書館所蔵）：ペリー艦隊



【写真4】『塵積成山』（一関市博物館所蔵）：磐溪が描いたペリー艦隊

肆ノ前ナル昆比羅ノ丘ニ登リ、縮遠鏡ヲ出シ、小柴・本牧ノ洋ニ掛リタル夷船」を確認したところ五艘であったが、土地の者の話では、七艘のうち一艘は本牧へ、もう一艘は前日に浦賀へ向かったということであった。このような様子については、自らスケッチしたり（写真4）⁵⁰、『金海奇観』に収録した津山藩絵師・鍬形赤子が艦船を描いた絵に来航時期を明示したり（写真5）、自らが入手した嘉永六年の『別段風説書』の記事と比較し、異同について確認している（写真6）⁵¹。幕府が入手していた海外情報の信憑性について、自らの探索により入手した情報をもとに確認しているのである。ここに収集活動により入手した情報の活用の一端が見られる。

二七日に浦賀へ到着すると、二五日に上陸した副将アダムスに関する情報を収集している。この時期ペリーは病気を理由に一切表に出ず、予備交渉はすべてアダムスに任されており、実質的なアメリカ側代表として行動していた。予備交渉では、幕府側も序列を重んじ、伊沢、鶴殿、松崎の応接掛に、浦賀与力組頭黒川嘉兵衛と辻茂左衛門が応対したことを聞き出している。そして、アダムスは横柄な態度をとっていたが、伊沢が「鍬扇ヲ開閉シテパチリトイフ音シケレバ、アハダムス忽チ劔把ニ手ヲカケタ」ということから、実は小心者ではないかとの人物評価をくだしている。

また、磐溪がもうひとり気にかけた人物がいた。その人物について以下に如く描写している。

応接ノ日夷船浦港ニ入ル時空砲十發早速放ニ打タリ、抜帝刺ニテ港中ニ入上陸シテ一人袖間ニ小冊子ヲ挟ミ、腰ニ墨斗ヲ挟ミ、処々立留リ、山川土地ノ形勢ヲ図スル容子也、

この人物は、ペリー艦隊随行画家のヴェルヘルム・ハイネである。舩船



【写真6】『甲寅襍録』（宮城県図書館所蔵）

で着岸し上陸したハイネは、小脇にスケッチブックを、腰に墨壺を掛け、いろいろな場所に立ち止まっては、土地の様子等を描いたという。そして、「伊沢君始対座ノ時モ一人或ハ立、或ハ脆キ、面貌ヲ図セリ」と、交渉中であるにもかかわらず一人だけ自由に動き回り、応接掛の人物画を描く等、記録係としての役割を果たしていることに注視している。

また、応接場所をめぐる新たな情報を得ている。今回の交渉も、当初は鎌倉の光明寺でおこなうことで幕府側は準備を進めていたが、より江戸に近い場所を望むアメリカ側の要求により、浦賀に変更していた。しかし、浦賀が狭隘の場所であることを理由に再度応接場所の変更が求められたことから、神奈川宿と本牧との間の横浜に変更することに決したという。この、応接場所が横浜になったことについて、磐溪は初め誤報ではないかと疑ったが、事実だと知り驚愕している。幕府がアメリカの要求を易々と受け入れる姿勢に驚きを禁じ得なかったようである。

そして、実際のアメリカ使節の動向を探索し、アメリカ側の意図について考察するとともに、一国へ交易を許可した場合他国へも同様の対応をとる必要があるとの認識を持つに至っている。磐溪は、常々ロシアからの交易要求を拒否しておきながら、ロシアより先に他国へ許可することとはロシアに対して信義を失うとして、ロシアとの交易を優先させるべきだとする立場をとっていた⁽²⁾。したがって、ロシアを差し置きアメリカとの交渉を進めようとする幕府の対応にも不信感をもっていたと思われる。

(4) 第一回横浜出張…嘉永七年二月一〇日

浦賀の出張から一度江戸へ戻った磐溪は、二月九日午後、翌一〇日に横浜で交渉が始まるとの情報を得ると、塾生の横手信太郎⁽³⁾をともなつて江戸を出発し、その日は川崎に宿泊した。すでに記したように、正月三日から浦賀調査をおこなった際も、塾生ひとりをともなつていたが、この「塾生」も横手であったとも考えられる。

そして、応接当日の一〇日、神奈川宿の台（現在の横浜市神奈川区台町）において宮内彦太郎なるものと合流し、横浜へ向かっている。磐溪と彦太郎とはすでに付き合ひがあり、磐溪は事前に横浜での応接を見聞

することを彦太郎と約束していたようである⁽⁵⁶⁾。(写真7)。

銚子出身の彦太郎の父・秀三の伯父にあたる宮本茶村は、常陸国潮来村の名主であつたが、山本北山に儒学を学んだ儒学者であり、私塾で子弟の教育に当たるとともに、水戸藩主・徳川斉昭による「天保の改革」に協力したことで郷士に取り立てられた人物であつた。その兄、宮本篁村は茶村同様山本北山に学んだ後、仙台藩の藩校明倫養賢堂の学頭として藩校改革を実行した大槻平泉に学び仙台藩儒となつた人物である。宮本家と、仙台の大槻家と親交があつたことから、宮本家と姻戚関係ある宮内家と仙台の大槻家と同族である江戸の大槻家とが親交をもつていたとしても不思議ではない。事実磐溪自身が弘化四年に銚子を訪れていた⁽⁵⁷⁾。したがって、磐溪と彦太郎とが行動を共にすることは何ら特別なことではなかつたのである。

なお彦太郎は、昌平坂学問所で塩谷宕陰に師事しており、一〇日の横浜応接の様子は、宕陰の弟である箕山とともに観ている。また一日には蒸気船へも搭乗していることが、彦太郎が認めた書翰に記述されている⁽⁵⁸⁾。(写真8)。

そして磐溪は、続けて横浜周辺で流布していた「噂」を中心に収集し、記録している。これらのほとんどは、情報源がよくわからない、虚実入り交じつた情報である。

まず、「某藩士筆記中抜書」が記述されている。船内で死亡したアメリカ兵が二月一日に増徳院へ埋葬された状況を伝えるもので、墓石に刻まれた銘等についても言及している。墓石を描いた画像は多方面に流布しているが、情報源の一つであると思われる。そしてここで注目すべきは、「墓表ノ文字写、二葉アリ、村上英俊ガ訳セシ文如左」という記述である。墓石の図に記載された英文を翻訳したのは、村上英俊という



【写真7】「嘉永七年二月二日付秀蔵宛宮内彦太郎書翰」（宮内敏氏所蔵）



【写真8】「嘉永七年二月一二日付秀蔵宛宮内彦太郎書翰」（宮内敏氏所蔵）

人物であるというのである。そして、欄外に「村上ハ真田侯ノ医也」と注記されている。横浜の警衛にあたっていた松代藩の医員である村上英俊は、フランス学の祖として有名な人物であるが、これまで知られていなかった村上の活動がここで明らかになっている。村上英俊は津山藩医宇田川榕庵に師事する等蘭学者・洋学者としても知られていたようであり、また佐久間象山が軍議役として横浜の警衛をおこなっていた松代藩医であったことから、磐溪はすでに村上についてもなじみがあったと思われる。

次に、「二月十五日貢献之事」と題された一節は、「塾生横手信太郎、駒藏二人、中津藩ノ士」からの報告である。この日に陸揚げされたアメリカからの献上品について詳細に記述されている。献上品ではないが、アメリカ人がもっていた洋傘や彼らが着用していた雨合羽に注目しており、洋傘について欄外に絵入りで解説を加えている。また、アメリカ兵に関する記述もみられ、農家で食事をしたさい飲酒のうえ狼藉を働いたことが記録されている。

さらに、「或人聞見記中抜書」は、アメリカの要求が「通商交易地所借用所望之由」であるとし、幕府の対応がだらだら交渉を進め、最終的に通商交易は認めず、「通信」すなわち国交を認め、必要物資の提供には応じるのではないかと、のちの「和親条約」締結を予測したような記載がみられる。そして、「通信」さえ認めなかった場合、真偽はわからないとしながらも、ペリーは英仏軍と連合して日本を攻めるつもりであろうと推測している。また、アメリカ人の容姿に言及し、「殊足ハカクノ如ニテ、鳥獸ノヨウ也、目ハ薄暈リ、茶色ニテ此方ニテ近眼トイフモノ、如シ、鶏ノ目カスミタルヨウ也、肌膚モ鳥ノ羽ヲムシリシ跡ノ如ク、其旁ヲ通行スル時ハ、犬ノ毛ヲ逆ニ撫タル時ノ如キ臭気アリ」と



【写真9】「船大將飲差大臣提督海軍統師まつちうせべるり」(黒船館所蔵)

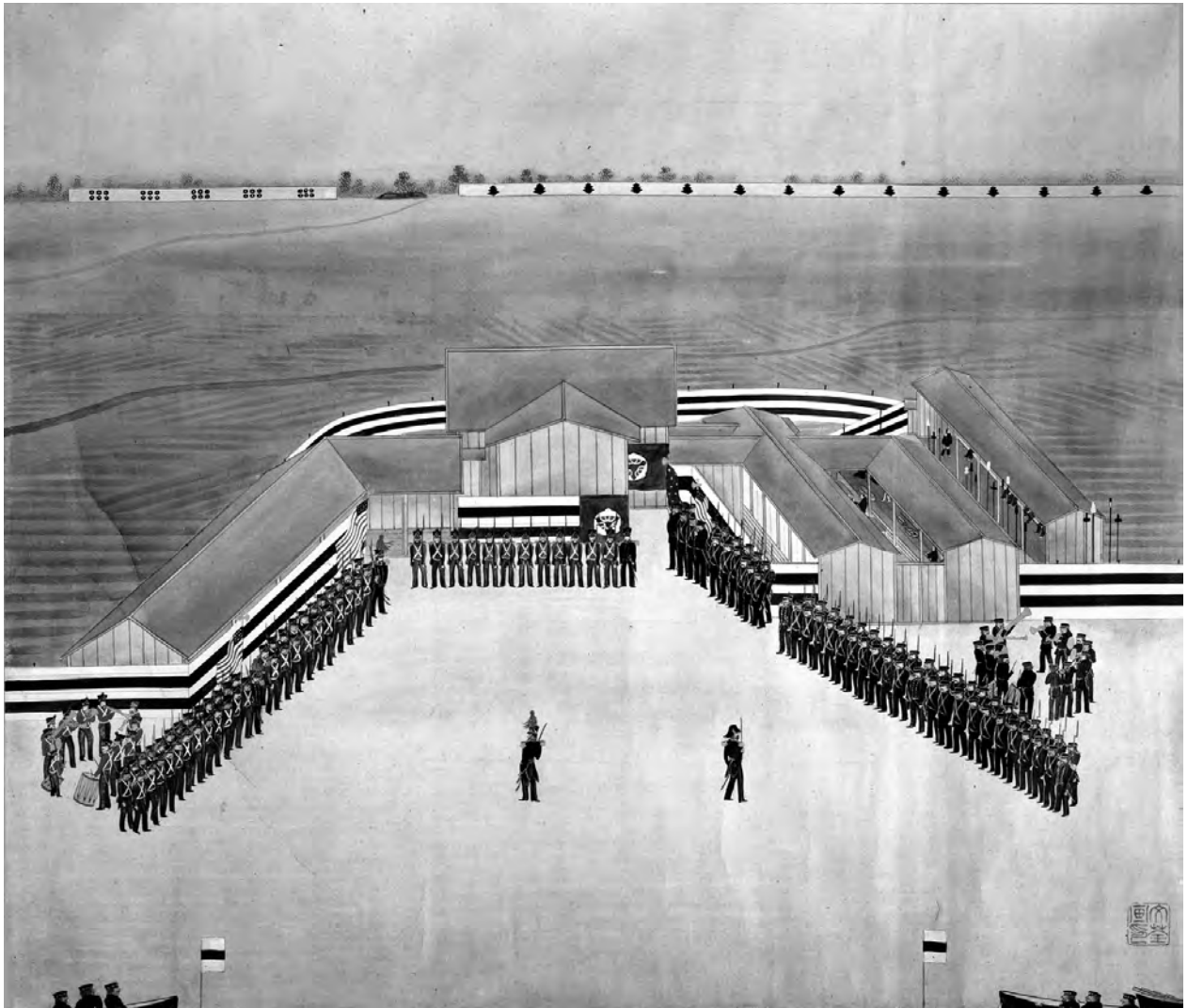
動物のようだ」と記している。この記述にもとづくような画像(「写真9」)があることから、この記述をもとにこのような画像が制作されたと類推される。

なお、今回の出張がいつまでおこなわれたかは明確にはされていないが、次節で示すように、二月一七日時点で磐溪は江戸に戻っている。一日の応接の状況を見聞後、横手等に情報収集を任せ、早い段階で一時帰府していたと考えられる。

(5) 第二回横浜出張…嘉永七年二月十九日

再度交渉がおこなわれるとの情報を得て、磐溪は二月一七日に江戸を発った。その日は、神奈川宿に投宿したが、そこで一八日は雨のためアメリカ使節が上陸できないことを理由に一九日に延期されることになったことが知られる。

そしてその一九日に上陸の様子を実見した磐溪は、以前から西洋軍事

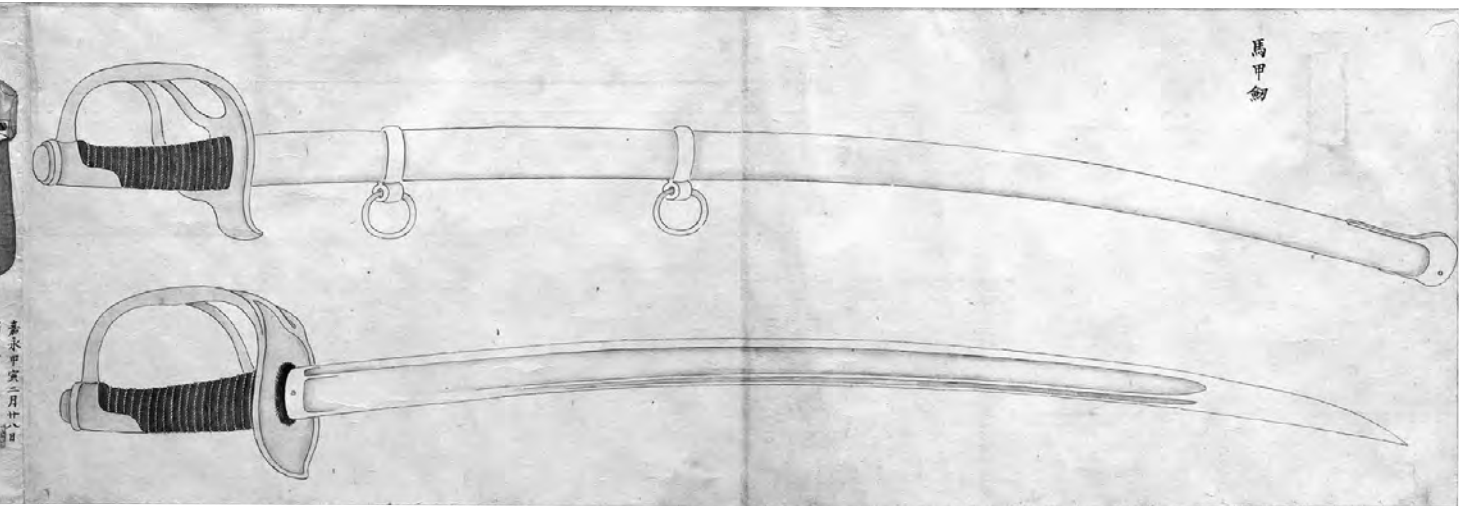


【写真 10】高川文釜『横浜応接場米利固銃隊布列図』（真田宝物館所蔵）

技術に興味を抱いていたこともあり、上陸時のアメリカ兵の儀仗に強い関心を寄せ、兵士の服装からその所作にいたるまで微に入り細に入り描写している。この状況については、横浜応接場の警衛を幕府から命じられた松代藩真田家の藩医・高川文釜（身分は藩医であり、藩医として横浜警衛に加わっていたが、もとは谷文晁に学んだ絵師である。）が描いており、その図（写真10）と磐溪の記述は一致している。なお、アメリカ人の体臭について触れており、「腐魚ノ臭ニ似タリ故」船中では香を焚いていることを紹介している。

さらに『金海奇観』に収められている図に関係する記述が以下のように続く。

松崎ニ呈セル六弾仕掛ノヒストオルヲ観タリ、引金ノ上ニ蓮実ノ如ク六丸ヲ容ルベキ穴アリ、捻ヲ以テ廻ス時ハ、六穴順々ニ廻ルヨウニナレリ、長サ九寸斗、照星アリ、別ニ鑄型アリ、釘錨ヲヌクタメノ道具アリ、玉ヲコムル仕掛ノ胴袋アリ、又星上ノ刀ヲ観タリ、刃長サ三尺二寸斗、鞘モ金ニテ制セリ、錫ノ堅キモノニ似タリ、鉄モ金ニテ作ル、長サ四寸餘、腕抜ノ金アリ、真鍮ヲ以テ作ル、三本アリ、片手持ト見ヘタリ、刃ハ片刃ニテ鉛ノ如ク鋒刃極メテ鈍ニシテ、豆腐庖丁ノ如シ、指ヲ以テ摩ストイヘ氏、傷ツクヲナシ、血槽アリ、ハ、キノ処モシパノ如キ織



物ヲ付タリ、鯉口ノ内一寸斗下二簫ノ舌ノ如キモノ双方ヨリ出テ開
閉ヲナスヨウニ作レリ、刃ヲ容ル寸ハ自然鞘走ヲト、ムルタメト
見ヘタリ、

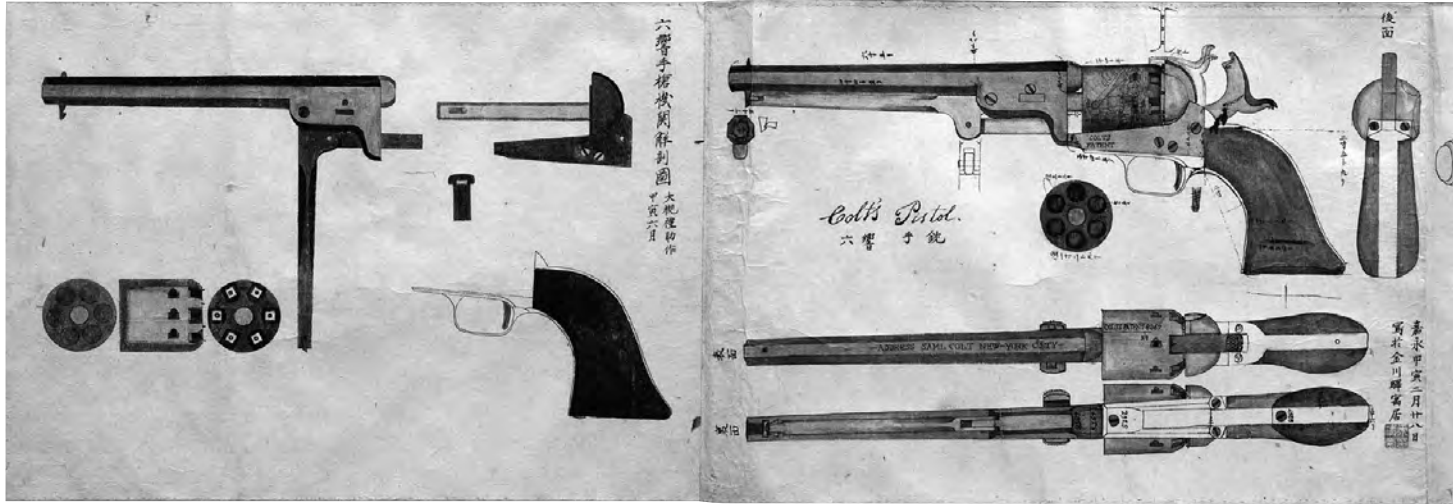
『金海奇観』に収録された「馬甲剣」と「Colt's Pistol 六響手銃」(【写
真11】⁶⁰)は、応接掛であつた昌平坂学問所教授・松崎満太郎へアメリカ
が贈つたものを実見していることがわかる。磐溪は、松崎への贈答品を
実見しそれぞれの絵を描き、『金海奇観』へ収めていたのである。『金海
奇観』の成立についても、新たな事実がここに明らかになったのである。
また、磐溪は松崎への贈答品に限らず、さまざまな献上品を実見して
いる。

○蒸気船ノ図アリ、月夜ニ浮ヘタル図也、○林氏ヘ呈スル品ノ内ニ
火口ヨリ鉛彈ヲコムル仕掛ノ短筒アリトイフ、又墨是可ト墨夷トノ
戦図、弁ニ戦記アリト聞ケリ、林氏ニ呈スル品十五種、松崎ニ呈ス
ル品五種トイフ、

月夜に浮かぶ蒸気船の図や応接掛筆頭・林大学頭復齊へ贈られたピスト
ル、ならびに「アメリカ・メキシコ戦争図」⁶¹等も観ていることがわかる。
昌平覺関係者である応接掛二人から、贈呈間もない実物を観る機会が与
えられたのである。

そして、「吞存山人」からの情報が綴られている。二月一〇日の応接
の状況、一五日の献上品に関する情報のほか、日本語通訳ポートマンや、
漢語通訳羅森についての記事も含まれている。また、アメリカ使節が連
れ帰ってきた紀州の漂流民寅蔵について、日本側へ引き渡した場合、厳
罰に処されるとの話を聞いたアダムスが、寅蔵の日本への引き渡しを拒
もうとしたエピソード等もみられる。

さらに、一九日の応接終了後、長州藩士からの情報として、二二日に



【写真 11】『金海奇観』（早稲田大学図書館所蔵）：「Colt's Pistol 六響手銃」と「馬甲剣」

黒川嘉平衛等が下田へ向かうのにあわせ、アメリカ船二艘も下田へ回航するということから、磐溪は下田が開港場となることを確信している。このほか、徒目付・平山謙次郎が、羅森に対して暴言を吐いたとか、横浜の百姓の家にアメリカ人が押し入って妊婦を暴行して死なせた等、虚偽入り乱れた情報も収録している。

まとめにかえて

ペリー来航時において大槻磐溪が情報収集活動を積極的におこなっていたことは一般にもよく知られているところであったが、具体的にいかなる情報源からどのような情報を入手していたのかということは明らかにされてきてはいなかった。そこで本稿では、まず磐溪の海外知識の情報源について、磐溪の対外意見書を執筆するにさいして根拠とした書籍を『大槻文庫書目』を参照し明らかにした。また、本来幕府によって厳重に管理されるべき対外関係文書を入手していたことも確認した。磐溪はこれらの文献や文書にもとづき、的確な意見を述べていたのである。入手した情報を活用していた恰好の事例である。

さらに、ペリー来航時の情報収集活動についても、これまで活用されてこなかった『米夷紀事』をひもとくことによって自らが調査したことに加え、情報源となった人物や当時流布していた「風説」についても確認することができた。特に情報源となった人物としては、まず幕府関係者で、浦賀奉行与力・中嶋三郎助、同・香山英左衛門があげられる。昌平覺関係者である林大学頭復齊、松崎満太郎から実際に献上された物品を観る機会が与えられ、のちにそれをもとに描いた図を『金海奇観』へ収録することとなった。

また、上田藩士・恒川才八からさまざまな情報を得ていたこと、儒者

仲間である宮内彦太郎と行動を共にしていたことも確認できた。一方、蘭学・洋学関係者である松代藩医・村上英俊とのつながりがあったことも類推できた。さらに、磐溪に同行したものととして仙台藩絵師・辻探昌や塾生・横手信太郎、同・駒蔵の名前を明らかにすることができたのである。⁽⁸²⁾

その他、具体的な姓名は明らかではないものの、中津藩士、長州藩士等、他藩の探索方からの情報や、土地のものからの嘘か誠かよくわからない情報まで、ありとあらゆる階層の情報を可能な限り入手していたことも明らかにすることができたであろう。

ただし、本稿では触れられなかった問題が残ったのも事実である。

まず、磐溪が収集した情報の信憑性については、まったく触れることができなかった。これは、今回活用した『米夷紀事』に記載されている情報の信憑性について、磐溪自身情報の信憑性を問題にしていなかったこととも関係している。つまり、虚実を問わず、入手できた情報については記録しておくというスタンスで情報を取り扱っていたからであるが、情報を活用するうえでは、収集した情報のなかから「真」であると判断したものを意識的に選び出して利用する必要がある。すなわち、磐溪はいつかの時点で収集した情報の真偽を区別しなければならなかったのである。

次に、大槻磐溪の評価に関する課題を指摘しておきたい。大槻磐溪は開国論者であるのか、あるいはいつから開国論者となったのか、という問題である。磐溪を開国論者として位置つけたのは磐溪の子孫であり、それを踏まえ後の歴史研究者がその地位を通説にまで押し上げていた。しかし、『猷芹微衷』をはじめ磐溪が著した対外意見書を読み直してみると、「開国論」として位置づけることについて再考を要すると考える。

さらにそれから派生して、そもそも「鎖国」と開国という二項対立的な見方でこの当時の対外意見書を読むこと自体に問題があるのではないかと思われる。「鎖国」・開国という概念から一度離れ、当時の状況を踏まえたくえであらためて当時の史料にあたっていくことが必要ではなからうか。「鎖国」祖法観の問題も含め、今日、我々が「鎖国」と定義している状態を、当時の人々は如何に認識していたのかをあらためて確認したうえで、その状態を変更することがいかなる意味を持っていたのかを問う必要がある。

最後に、些細な問題ではあるが、一括されただけの『受取始末』と朱による書き込みをもつ『受取始末』の成立ならびに伝播についても幕末情報史研究において検討を要する課題である。『バタヴィア総督公文書』と『日蘭通商条約草案』の受取可否の経緯を記した事務文書を一括してまでなぜ入手する必要があったのかということ自体問題である。すなわち『風説書』、『別段風説書』以外のオランダからの公文書の「受取可否」という手続きになぜ注目が集まったかということである。さらに、それに対して朱書きによる幕政批判を含んだ『受取始末』が必要とされたのかも興味深い問題である。阿部正弘が、海防関係者へ回達したという事実も含め検討するに値する課題である。

註

- (1) ペリー来航前後の情報収集活動については、岩下哲典『幕末日本の情報活動―開国の情報史―』（雄山閣、初版・二〇〇〇年、増補改訂版・二〇〇八年、普及版・二〇一八年）をはじめ多くの蓄積がある。収集活動の主体別に、大名、藩士、豪農など階層ごとに研究成果が報告されているが、紙幅の関係からすべて

を紹介することはできない。したがって本稿が対象とする、儒学者による情報収集活動に関する先行研究については、以下で適宜触れることとし、それ以外の研究成果については、岩下、前掲書を参照願いたい。

なお、嘉永七年二月、ペリーがはじめて横浜へ上陸した直後に江戸から横浜へ派遣された松代藩士は、横浜へ向かう途中、川崎宿を過ぎたところより、「諸家の物見とミえて、既数騎万年屋などに憩ふたり」（『神奈川公役日記』『開港日記』東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）と記しており、多くの藩の探索方が活動していたことがわかる。詳細については、嶋村元宏「ペリー来航に関わる情報収集活動とその伝播について―画像資料を中心に―」（『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』第四一号）を参照のこと。なお本稿は、神奈川県立歴史博物館が二〇一二年に開催した特別展『ペリーの顔・貌・カオ―黒船の使者の虚像と実像―』に合わせ発行した展覧会図録に収載した「ペリー来航前後の情報収集活動」で明らかにした新知見を核に学術論文としたものである。

(2) 『津山市史』（第五巻 近世Ⅲ―幕末維新―、一九七四年）五―七頁。津山藩の『（江戸）日記』（津山市立郷土博物館所蔵）により、箕作と鍬形が、船上からアメリカ艦隊の探索をおこなったこと等を明らかにしている。

(3) 西村直城「嘉永七年、アメリカ船を見学した福山藩士に関する資料について」『広島県立歴史博物館紀要』第一六号。

嘉永七年二月十日から始まった横浜での応接のさい、江木と石川が幕府応接掛井戸弘道の配下として、アメリカ使節の動向を探索したこと等が記された記事を含む『雑綴』（『窪田家文書』広島県立歴史博物館所蔵）等を紹介している。江木は頼山陽ならびに古賀侗庵に、石川は頼山陽に学んだいずれも福山藩の儒学者である。儒学者がペリー来航時の探索をおこなった事例の一つである。なお、同内容の記録が、『金川遊記』として、関西大学図書館増田渉文庫に所蔵されている。神奈川県立歴史博物館では、関西大学図書館の許可を得てその副本（電子複写版）を所蔵している。

(4) 大槻文彦『磐翁年譜』私家版、一八八四年。嘉永六年の項には、「六月三日垂米利加船渡来其見届ヲ為セレ浦賀ニ往復シ復命スルヲ兩度」とあり、嘉永七年の

項には、「正月十五日米国船再ヒ渡来ニツキ命ヲ奉ジ数度浦賀神奈川ニ往來復命ス」とあるのみで、磐溪の活動の詳細については全く触れられていない。なお、磐溪の伝記的研究である大島英介『大槻磐溪の世界―昨夢詩情のころ―』（宝文堂、二〇〇四年）は、その記述の多くを、『磐翁年譜』ならびに清修述・清復補・茂雄等記『磐溪先生事略』（私家版、一九〇八年）に拠っており、磐溪の情報収集活動については、両史料の記述以上のことを明らかにしていない。

(5) 『金海奇観』の成立については、嶋村、前掲論文、ならびに岩下哲典「解説 大槻磐溪編『金海奇観』と一九世紀の日本」（『復刻 金海奇観』雄松堂、二〇一四年）を参照。なお、江戸東京博物館も『金海奇観』と題する画卷を所蔵している。加賀藩儒者・西坂衷（成庵）が、大槻磐溪から磐溪が編纂した『金海奇観』を借用のうえ、一部を写したものである。両者の関係及び西坂による『金海奇観』の成立については、嶋村、前掲論文参照。

(6) 嶋村、前掲論文。

(7) たとえば、梅沢秀夫「朱子学者大槻磐溪の西洋観」『清泉女子大学紀要』第三四号。

(8) たとえば、島森哲男「大槻磐溪の漢詩」『宮城教育大学区紀要』第五四号、杉下元昭「大槻磐溪と『本朝通紀』…『王朝の文人と江戸漢詩』補記」『日本漢文学研究』第一一号、等。

(9) たとえば、野村正雄「津山藩主松平斉民と大槻磐溪各々の貼込帳に残る西洋の版画数枚の委細解明と二人の交流」『一滴』第一七号、大島英介「磐溪文稿」の想念について―大槻磐溪と頼山陽の出会い』『修紅短期大学紀要』第二四号、等。

(10) 工藤宜「江戸文人のスクラップブック」（新潮社、一九八九年）。なお、『塵積成山』は、現在一関市博物館が所蔵しており、二〇〇六年七月には、『塵積成山』を紹介したテーマ展『塵も積もれば―磐溪先生の貼り交ぜ帳―』が開催されている。また、その展覧会を担当した小岩弘明氏によって「塵積成山」について紹介した「大槻磐溪の貼り交ぜ帳について」（『一関市博物館研究報告』第一〇号）がある。

(11) 鶴飼幸子氏が参照した『献芹微衷』は、大正一四年に『磐溪先制』として『昨

夢詩曆』と二冊組で発行された活字本一冊と、その刊行にさいしての稿本と思われる一綴り、「仙台文庫叢書」第一篇の七に所載の写本、及び今泉泉州氏旧蔵の写本一冊の計四種」ならびに、早稲田大学図書館所蔵の磐溪自筆稿本二冊である（『大槻磐溪と開国論』『仙台市博物館年報』第六号、一九頁）。

(12) 『大日本古文書 幕末外国関係文書』第一卷（東京大学出版会、覆刻一九七二年）一、二二号文書（以下、『幕末』一一一二二、のように、巻数と文書番号により略記する）。本文中の文書名は、『幕末』で使用している件名による。

(13) 『幕末』二一三二。

(14) 『幕末』二一三二。

(15) 『幕末』三一三三。

(16) ②、③、④、⑤は、それぞれ「米利幹議一」、「米利幹議二」、「魯西亜議一」、「魯西亜議二」と表題が付され、『続献芹微衷』としてまとめられている。そして①と『続献芹微衷』とをあわせ、『献欣微衷 正統』の標題のもと一冊とし、さらに開国の意向を詩に詠んだとする漢詩集『昨夢詩曆』一冊と合わせ『磐溪先制』全二冊として大正一四年に出版されている。編者である大槻如電、文彦、茂雄による連名の後書きによれば、本書は、前年に大磐磐溪が贈位されたのを機に、磐溪がいち早く開国の立場をとっていたことを示すことを目的として編集、発行したものであることを明らかにしている。

(17) 『磐翁年譜』「嘉永二年」の項。「閣老阿部侯ガ外防ノ論文ニ因リ十月三日献芹微衷五篇ヲ上ル其隣交篇ハ魯西亜ト相交ルベキ利害ヲ説ク」（七頁）とある。

(18) 『磐溪先生事略』五〇頁。引用文中の句読点は、嶋村による。

(19) 鶴飼、前掲論文ならびに、大島、前掲書でも、『磐溪先生事略』および『磐翁年譜』を踏まえ、『献欣微衷』を開国論として評価しているが、私見としては、本史料は、「鎖国」を維持するための海防強化、具体的にはイギリスからの交易要求を防ぐことを主眼とした海防論として読むべきであると考ええる。

この『献欣微衷』が提出された嘉永二年一〇月は、八月にイギリス軍艦マリナー号が浦賀、下田で測量するという事件があった直後であり、前掲『磐翁年

譜』嘉永二年の項に「閣老阿部侯ガ外防ノ論文ニ因リ」とあるように、阿部が求めたのは海防意見書である。このことから、磐溪は海防論として『献芹微衷』を執筆したと考えるべきであろう。

さらに内容的にも、『海堡篇』、『陸戦篇』、『水戦篇』と、これまでに他の識者によつて著された海防論同様、台場の築造や戦闘法について論じており、開国論が主張されているという「隣好篇」も国防上の具体的な対応策の一つとして読むのが自然である。すなわち、『隣好篇』で磐溪が述べていることは、ロシアと同盟を結び、北辺の脅威を排除すること、イギリス使節が来航することが予測される西南方面に注力して、海防強化に努めるべきであるという、新たな安全保障体制の構築を提言したものと解釈すべきである。ロシアに対して交易を許容すべきとはいえるが、これは交易を要求するイギリスを始めとする西洋諸国の要求をロシアににくいとめてもらう見返りとしてロシアにのみ認めようとするものであり、「鎖国」を放棄し、西洋諸国に対して積極的に開国すべしと述べているわけではない。したがって、開国論として位置づけることは困難である。

なお、オランダ、中国に加え新たにロシアへ交易を許可し、通商国を増やすことが、当時のいわゆる「鎖国」の放棄にあたらないとする磐溪の認識が何を根拠にしているのかは大変興味深い課題である。この課題は磐溪個人の對外認識にかかわる問題のみならず、当時の人々にとって何を以て祖法として松平定信以降認識されるようになった「鎖国」が終わるのか、裏をかえせば、開国とはいかなる状態を指すのかという、開国史研究史上における大きな課題であるので、別稿であらためて検討することにした。

(20) 『幕末』三一三三。

(21) 『幕末』三一三三の史料は、『日本思想大系 幕末政治論集』（吉田常吉校注、岩波書店、一九七六年）に、「大槻平次上申書（嘉永六年十月二十日）」として収録されており、「大通詞何某」については「和蘭大通事石橋助左衛門」と頭註にある。

(22) 『幕末』二一三二。

い。すなわち、受取可否の評議をおこなった海防掛が西洋事情について無知であることを指摘しており、また、オランダ国王の開国勧告への対応については、「彼国今美意ヲ以御一大事を御忠告仕候義を、何故如此御咎メ被成候哉、更ニ合点不出来候」と、納得がいかない旨記述している。さらに嘉永五年にペリー来航が予告されていたにもかかわらず、何の対応もしなかったことについて批判する等、自身の主君である阿部正弘がとつた一連の対外政策に否定的な立場をとっており、幕閣に近い者の記述とは思えない。そもそも、阿部に近侍していた石川は、註30・31で指摘したように『受取始末』に収録された一連の文書について接することもできたわけであり、後日関係文書をまとめ、幕政批判を含む朱書きを加えたうえで外部へ提供するというのはあまりにも不自然である。

但し、石川が添川へ朱書き入りの『受取始末』を提供したことについては、否定するものではない。岩下哲典氏は、自身が所蔵する『受取始末』（和蘭告密御請取始末 全）を紹介、分析されているが、その『受取始末』の「一丁目表には、『嘉永五年壬子六月 和蘭告密書御請取始末』とあって「阿部令」と書かれて」おり、それが「海防掛・浦賀奉行・江戸湾防衛の四家（彦根・会津・川越・忍）、長崎防衛の佐賀・福岡藩、琉球を事実上支配した薩摩藩」へ回達されたことを明らかにされている（岩下哲典「徳川慶勝筆写の嘉永四・五年別段風説書と黒田斉博の嘉永五年対外建白書」（前掲、『オランダ別段風説書集成』六〇四頁）。すなわち、朱書きされた状態の『受取始末』を阿部正弘が所持していたことが類推されることから、阿部のもとへもたらされた朱書きされた『受取始末』を石川が入手し、外部へ提供したと考えることは可能である。

なお、阿部のもとへ朱書きされた『受取始末』がどのようなもたらされたのかという点は興味深い。朱書きされた『受取始末』に関しては、その成立や伝播状況等、多くの課題が残されている。

(38) 東北大学附属図書館狩野文庫所蔵。

(39) 静嘉堂文庫所蔵。本史料は、磐溪の自筆本である。

静嘉堂文庫本の他に、東北大学附属図書館狩野文庫にも同名の史料がある。但し、制作者について「堀達之助／志筑辰一郎訳」としているが、これは収録された最後の和訳文書の訳者を、本史料全体の制作者と誤解したからであると

思われる。「于時安政二卯年十二月写、図下田湊図一枚別在／公暇亭主人」と奥書にあるように、安政二年二月に「公暇亭主人」なる者が、磐溪が編纂した『和米始末』を写したと考えるべきである。なお、静嘉堂文庫所蔵『和米始末』には、「下田湊図」は添えられていない。

(40) 『幕末』一一一一二。

(41) 嶋村、前掲論文、参照。

(42) 『幕末』七一六一は同じ文書である。

(43) 前註4。

(44) 『幕末』一一一一二。

(45) 同前。アメリカ船であると判明するのは、浦賀奉行与力・中島三郎助、同・香山英左衛門等が旗艦サスケハナ号へ乗り込み、蘭語通訳ポートマンから聞きだした同日中の「未中刻頃」のことである（『幕末』一、八〇九頁）が、磐溪が浦賀周辺で情報収集活動をおこなっていたと思われる六日頃までには、アメリカ船であると断定した情報は流布していなかったようである。六月五日、代官斎藤嘉兵衛から勘定奉行へ宛てられた届でも、船籍不明であり、現地ではイギリス船ではないかと噂されていると報告がなされている（『幕末』一一三九）。

なお、当時の状況と嘉永五年の「オランダ別段風説書」などの事前情報によってペリー来航について知っていた者のなかには、吉田松陰のようにアメリカ船であろうと推測した者もいたようである。岩下氏は吉田松陰の書翰を引用し、五日には「松陰は、今回の船は「北アメリカ国」、つまり現在の用語でいえばアメリカ合衆国の船に違いないと断定している」（岩下、前掲書、七頁）が、引用文を確認すると「船は北アメリカ国に相違無之、願筋は昨年よりの風聞の通りなるべし」とある。これは、異国船から出された要求が、「昨年よりの風聞」すなわち「嘉永五年来の噂」通りであることを根拠に、「北アメリカ国」に間違いあるまい、と推断したのであり、確実にアメリカ船であると断定してはいない。

(46) 大槻磐溪『米夷紀事』国立国会図書館所蔵。

外題はもたないが、内題に「米夷紀事 大槻磐溪著」とある。また、関儀一郎・関義直共編『近世漢学者著述目録大成』東洋図書刊行会、一九四一年）に大槻磐溪の著作として書名がみられる（一一四頁）。

本史料は「止至善塾蔵」罫紙に整然とした字により記載されており、すべての収集活動を終え、後日まとめなおしたと思われる。「止至善」とは、『大学』にある「止於至善」に由来するものと思われる。真理や善に到達した状態は、ともすれば揺れ動き、真理から外れた状態にすぐ戻ってしまうものであるから、真理であり善である状態にとどまる努力が必要という意味である。「止至善塾」については、磐溪の私塾と思われるが不詳。

ペリー来航時の磐溪による探索行動は、藩命を受けての情報収集活動であり、藩への復命が本来求められるはずである。その意味で、『金海奇観』は関係する図像をまとめた復命のための画卷と位置づけられる。従って、文字による復命書もあわせて作成、提出されてしかるべきであるが、これまでそれに類する史料の存在は確認されていない。この『米夷紀事』が復命書であるとはその名称から考えて断定できないが、復命書を作成するうえで下敷きにする等なんらかの関係があると思われる。後考を俟ちたい。

- (47) 以下、本章における磐溪の行動については、とくに断りがない限り『米夷紀事』による。本史料については、前掲『科研費報告書』において概要を紹介しており、本章の記述はそれに多くを拠っている。また、『科研費報告書』で全文の釈文を掲載していることから、本稿では釈文の引用は極力抑えた。『科研費報告書』を参照されたい。

- (48) 『磐翁年譜』嘉永七年の項。

- (49) 関良基『日本を開国させた男、松平忠固』（作品社、二〇二〇年）三三頁。

- (50) 写真4の書き込みには、「嘉永七年正月十七日余奉命赴浦賀」とある。しかしながら、『米夷紀事』では、一月二三日の藩命により二五日に江戸を発ってから金沢に到着したあとの行動について、「扇屋トイヘル茶肆ノ前ナル昆比羅ノ丘ニ登リ、縮遠鏡ヲ出シ、小柴・本牧ノ洋ニ掛けタル夷船ヲ観ル方ニ五隻アリ、土人云七隻ノ内一艘ハ本牧ノ方ニアリ、一艘ハ昨日浦賀ニ至ルトイフ」と記述され、改行後、「廿七日、浦賀ニ至リ」云々とあることから、浦賀到着前の一月二七日にスケッチしたものと考えたい。

- (51) 『甲寅襍録』嘉永六年、宮城県図書館所蔵。

- (52) 嶋村元宏「日米・日露和親条約における最恵国待遇について―「信義」と「公

平」―」（『品川歴史館紀要』第三〇号）参照。

- (53) 二月九日の記述では、横手の素性は明らかにされていないが、一五日の記述に「塾生横手新太郎・駒蔵二人、中津藩ノ士二伴テ横濱二行」とあることから、磐溪の塾生であることが判明する。

- (54) 「嘉永七年二月二日付秀蔵宛宮内彦太郎書翰」宮内敏氏所蔵。

この書翰に「又々一兩日中大槻君と様子見届ケニ罷出可申候」とあり、かつ自身も、一月二五日から浦賀へ探索におもむき、詳細な異国船情報を得たこと、ならびに二月一日に江戸へ帰ったことが記されている。

なお、本史料ならびに註56の史料は、「WEB濱宅資料館」(<http://www.fc3-net.ne.jp/~hamataku/syokansyu.html#hikotarou>)で公開されている。二〇二二年一月八日最終閲覧。

- (55) 『銚子市史』（国書刊行会、一九八一年）四五九頁。この時は、銚子の豪商田中玄蕃の招きにより訪れ、多くの詩を遺している。

- (56) 「嘉永七年二月二日付秀蔵宛宮内彦太郎書翰」宮内敏氏所蔵。

二日、一日にアメリカ側が測量をおこなうこと、一日に再びおこなわれる応接を見届けるつもりであることが記されている。

- (57) 村上英俊については、富田仁『フランス語事始―村上英俊とその時代』（NHKブックス四四一、一九八三年）、同「村上英俊の仏学研究の意義」（『文藝論叢』八号）、田中貞夫「村上英俊『三語便覧』成立の一過程（『比較文学』第一四巻）、『仏学始祖 村上英俊―佐久間山宿出身の洋学者』（大田原市那須与一伝承館、二〇一六年）のように、フランス学研究者として研究、紹介されている。しかしながら、いずれの先行研究においても、本稿で明らかにした英俊の活動については言及されていない。なお、村上がペリー来航時の探索についてまとめたものに、『棠蔭先生見聞記』（早稲田大学図書館）がある。本史料は、嘉永七年二月一五日から二六日まで収集した情報と、「蒸気車本名小火車格式連煤炭架連路」、「武州久羅岐郡横浜村応接場大略之図」、「応接場内平面図」の三図が記載されている。この史料もこれまで活用がされていなかったものであり、稿を改めて、村上英俊のペリー来航時における情報収集活動について論じることとしたい。

(58) 「船大將欽差大臣提督海軍統帥まつちうせべるり」 木版墨摺、江戸時代末期、黒船館所蔵。

(59) 高川文筌『横浜応接場米利堅銃隊布列図』紙本着色、江戸時代末期、真田宝物館所蔵。

(60) 「馬甲剣」は、幕府側の記録では「騎兵軍刀」として記録されている。また、「Colt's Pistol」六響手銃は、すでによく知られているように、コルト社製リボルバー式六発拳銃である。『金海奇観』所収各図については、岩下、前掲解説書一五～一六頁参照。

(61) アメリカが当時老中・阿部正弘へ贈った「アメリカ・メキシコ戦争図」は現在も阿部家が所蔵している。この史料の文脈では林へ贈られたもののように読めるが、他の複数の史料にも、林へ贈られたとするものはない。阿部へ贈られたものとの区別がつかないまま記載したのであろうか。

(62) なお、二月二日頃までで記述が終わっている『米夷紀事』にはみられないが、前年嘉永六年に長崎でおこなったロシア・プチャーチン使節の応接を終えた箕作阮甫が、二四日に神奈川宿の鰻店辻村に投宿していた磐溪と交流をもったことや、磐溪と箕作秋坪、宇田川興庵、ならびに磐溪が編んだ『金海奇観』へペリーの肖像画などを提供した絵師・鍬形赤子など津山藩士との関係について、木村岩治編『箕作阮甫 西征紀行 幕末の日露外交』（津山洋学資料館友の会、一九九一年）をもとにした指摘がある（岩下、前掲解説書、三四頁）。

〔付記〕

本研究は、JSPS科研費JP一八K〇〇九五二「開国期・危機的状況下における知識人による情報活動と意志決定過程に関する研究」（研究代表者・嶋村元宏）ならびに、JSPS科研費JP二〇H〇一三一四「オランダ別段風説書の研究」（研究代表者・岩田みゆき）によっておこなった。

なお、本論文審査後、古河歴史博物館所蔵「鷹見泉石歴史資料」（国指定重要文化財）に含まれる、「米利幹人告牒」を調査した。これは、註28で紹介したとおり沼田次郎氏によりその存在が確認されていたものである。本史料は泉石自身により書き写されたものであるが、泉石が当初参照した原本で不明瞭な記述部分については、「右大槻磐溪之記録ニ依て朱を以補ふ物也」と末尾に朱書きしているように、大槻磐溪が所持していた『日本雑纂』をもとに書き改めたことを確認した。朱書き入りの『受取始末』同様、磐溪による『和米始末』あるいは、磐溪が入手したレフイスゾーンの『日本雑纂』がどのように流布したかについても改めて検討したい。

また、入稿後、「相州浦賀沖之異国船渡来一件」一冊（神戸大学附属図書館社会科学系図書館住田文庫所蔵）に、「受取始末」の一部であるペリー来航予告に関して、新任オランダ商館長ドンケル・クルティウスが長崎奉行へ伝えた追加情報の写が収められているのを確認した。これは、嘉永六年のペリー第一回来航時の状況を伝えるよく知られた文書につづけて、冊子の最後に「甲必丹ヨリ長崎^江差出候書付写」と表題が付されている。原文は嘉永五年九月にオランダ通詞西吉兵衛と森山栄之助によって訳されたものであるが、その写し本文の後ろに、「嘉永六年丑十一月写秋田」との記載がある。さらに、冊子自体の表紙には、「北ノ亜墨船渡来一件／牛田氏蔵記」（／は、改行を示す）、本扉に「嘉永六癸丑年六月三日ヨリ之變／相州浦賀沖^江異国船渡来一件／牛田」とあることから、「秋田」が写したものを、嘉永六年十一月以降に「牛田」がペリー来航に関する文書類とともに、一冊にまとめたものと考えられる。「受取始末」の伝播に関する貴重な史料であり、これも活用し、「受取始末」の伝播過程についても分析をすすめることにしたい。